

(中谷吉郎ノ文ニ據ル)

八 學者の苦心

十年一昔といふことを思ふと、上田・松井の二君が國語辭書の編纂に着手せられてからも、一昔はとうにすんだ。編纂開始の心祝ひといふので、知友數名が晚餐會に招かれて打ち與じたのは、ついでこの間のやうな氣もするが、その頃はじめて小學校に入つた子が娘は、既に嫁いで人の子の母となつてゐる。短いやうで長いものである。今や、その第一巻がいよいよ出版になるといふ音づれを聞いて、予は初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかも、それよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。

年の流れは水の流れと同じく、世事の變遷は行く雲のやうに極まりがない。この一昔の間には、いろいろの大事件が起つて、わが日本の國勢を一變せしめた。政治や工業や貿易やの進歩・發展の跡を見ても、その間の十年は、通常の十年ではなかつた。二君の編纂事業は、かういふ中に、徐々にその工程を進めて行つた

のである。

鑛山から掘り出されて、選り分けられ、鑛分けられて行く鑛石のやうに、幾萬、幾十萬とも知れない古語や新語は、幾百部、幾千部の典籍・圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書き留められ、整理せられる。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く。一月、二月、三月、四月、秋も暮れ、春も逝いて、曆も幾たびか改る。同じ仕事果てしなく、いつまでも続く。はたから見れば、はかの行かぬことは、はがゆいやうで、いつ片の附くことかと危ぶまれるほどであつた。編輯室は松井君の邸内の離れ家にあつたが、それでも夜半の半鐘に膽を冷して、よそながら無事を祈つたことも幾たびかわからぬ。二君の筆と頭腦は間斷なくこの間に活動して、採るものは採り、棄てるものは棄て、その進歩は遅いが、その成果は確實であつた。かくて、粒々積み上げた砂子も遂には山を成す鑛のやうに、編纂がやゝ緒に就いたまでには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したものであつた。

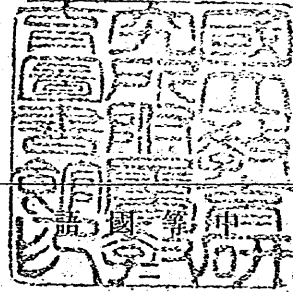
中等國語二

文部省

文部省調查局刊行課寄贈

(中) ¥ 1.80

(11)



APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Jul. 1, 1946)

昭和二十一年七月一日印刷 同日翻刻印刷
昭和二十一年七月五日發行 同日翻刻發行
〔昭和二十一年七月五日 文部省検査済〕
著作權所有 發行者 文部省

【中】定價壹圓八拾錢

部 省

發行者 東京都神田區岩本町三番地
中等學校教科書株式會社

代表者 加野 庄吾

印刷者 大日本印刷株式會社
東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

代表者 佐久間長吉郎

發行所

中等學校教科書株式會社

教科書番號 11ノ2

目 録

文 法 篇

〔口語の續き〕

- 一 口語助動詞の接續と活用(一)……………一
- 二 口語助動詞の接續と活用(二)……………七
- 三 口語助動詞の接續と活用(三)……………十一
- 四 口語助詞の種類と用法……………十六

附 表

- 第一表 口語助動詞活用表……………二十五
- 第二表 口語助動詞接續表……………二十六
- 第三表 口語助詞接續表……………二十七

〔文 語〕

- 一 文語とその文法……………二十八
- 二 自立語で活用の有るもの……………二十九
- 三 自立語で活用の無いもの……………三十
- 四 附屬語で活用の有るもの……………三十五
- 五 附屬語で活用の無いもの……………三十五

六 文語動詞の活用(一).....	三十六
七 文語動詞の活用(二).....	四十
八 文語形容詞の活用.....	四十六
九 文語形容動詞の活用.....	四十八
附 表	

第一表 口語及び文語動詞活用表.....	五十二
第二表 口語及び文語形容詞活用表.....	五十四
第三表 口語及び文語形容動詞活用表.....	五十四

漢 文 篇

一 學 習.....	一
二 立 志.....	六
三 藝 苑.....	八
四 成 語.....	十三



學者の仕事はちみである。目ざましく世人を驚かすものなことはない。二君が拮据十餘年の編纂事業も、静かな一室に静かに行なはれたのである。けれども、一たびその室にはいつて、山成す材料を見上げる者は、何人もその難事業たることを承認せずにはゐられぬ。又、編纂者の決心と根氣とを尊敬せずにはゐられぬ。さうして、それが決して學者の開事業ではなくて、實は國家的大事業であつたことに考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、随つて、國家教育の根柢となる國語の調査・整理が、緊急な事業であることはいふまでもない。國家の發展は、教育の力によらねばならず、教育の進歩は、國語の普及が根本である。狭い編輯室に行なはれて、何ら世人の注意をひかなかつた學者の研究が、實は絶大な國家的事業であつたといふところに、學者の生命があり、學術の意義があるのである。

十年以前に比べて、鐵道の哩數の大幅に増加したのを祝賀する人は、これと同時に、わが國語界が、十餘年後の今日、本書を有するに至つたことを驚歎し、慶賀しなければならぬ。文物の整備することは、國家の

誇りであり、精神界を支配する有力な武器である。完全な一辭書が存在することは、國民にとつての大きな強みである。この一大産物が、堅忍不拔な二君の手によつて成就せられたことは、友人たる予の言ひ知らぬ喜びを感ずる所以である。この十年は、國語界に於いてもまた、無意味な十年ではなかつたのである。

學者の事業は、いつも世間と没交渉のものではない。専心な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於いても、進歩して行く世間を一日もよそに見てゐるわけには行かぬ。十年一昔の間には、國語そのものの中にも、絶えず變遷が行なはれてゐる。それに注意するだけでも、容易な業ではない。静寂な編輯室は、紛糾した實社會と常に相往來してゐるのである。

幾多の困難に打ち克つて、國民の覺知せぬ間に、その背後に大きな國家的事業を建設せられた二君の勞苦は、今更述べるには及ばぬ。後世の人は、必ずこれを、明治時代に企てられて大正時代に完成した大事業の一つに數へるであらう。

予は二君の満足と喜びを察知すると同時に、今か今かと十餘年を待ち暮した同友と共に、先づ二君の成業を祝して、一大白を浮かべようと思ふのである。

(芳賀矢一ノ文ニ據ル)

文法篇

「口語の續き」

一口語助動詞の接續と活用(一)

- 「二」(一)本を 買う。
(二)本を 買はなす。
(三)本を 買ひます。
(四)本を 買った。
(五)本を 買はせる。
(六)本を 買ひました。
(七)本を 買はせない。
(八)本を 買はませんでした。

問題1 右の例文を、意味の上からそれ／＼比べてみよう。

問題2 その意味の違いは、どの部分で表されてゐるか。

問題3 それ／＼の例文には、助動詞が幾つ用ひてあるか。

文法篇

問題4 助動詞に活用の有ることを、右の例文に就いて示せ。

「三」(一)話す

- 起きる (一)なす
受ける (二)ます
来る (三)た
運動する (四)よう
(二)美しい (五)らしい
(三)静かだ
(四)生徒

問題5 右に挙げた助動詞のうち、動詞に附くものはどれか。形容詞に附くもの、形容動詞に附くもの、體言に附くものはどれか。

問題6 用言に附くものは、用言のどんな活用形に附くか。

「三」 右によつても知られる通り、助動詞のうち、或るものは用言に附いてゐる／＼の意味を加へてその叙述を助け、或るものは體言などに附いてこれに叙述する意味を加へる。さうして用言に附く時、用言

のどんな活用形に附くかが助動詞ごとにきまつてゐる。

【四】せる させる

〔字を 書く。〕 〔人が 見る。〕
〔字を 書かせる。〕 〔人に 見させる。〕

右の言ひ方を比べてみよ。「せる」「させる」は、右のやうに、使役即ち他に動作をさせる意味を表す。

「せる」「させる」は次のやうに活用する。

- (一) 少しも 本を讀ませ 少しも 考へさせな
なす。
- (二) 大いに 本を 讀ま ゆつくり 考へさせ
ます。
- (三) 本を 讀ませる。 静かに考へさせる。
- (四) 讀ませる 時は 良 考へさせる ことが
書を 與へる こと よいのだ。
- (五) 讀ませれば 讀ませ もつと 考へさせれ
るほど よす。

(六) もつと 本を 讀ま もつと 考へさせる
せる(せよ)。(させよ)。

問題 7 動詞にならつて、「せる」「させる」の活
用を表に作れ。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
せる						
させる						
主な用法	ナイにマスに言 連なる連なる切		ひトキにバ る連なる連なるに 切			命令の意 で言ひ

問題 8 「せる」「させる」の活用は、用言のどの
活用と同じか。

問題 9 次の動詞にそれ／＼「せる」「させる」を附
けてみて、「せる」の附く動詞と、「させる」
の附く動詞とを分けよ。

知る 打つ 用ひる 附ける 寝る 喜ぶ 射る
受ける 来る 相談する

問題 10 「せる」が附くのと「させる」が附くのと
は、二つ／＼の動詞で違つてゐるのか、それと
も動詞の活用の種類によつて分れるのか。

問題 11 「せる」「させる」は動詞のどんな活用形
に附くか。

【五】れる られる
目を うばはれる。

人から 話しかけられる。

問題 12 右の「れる」「られる」の活用を調べて活
用表を作れ。

問題 13 この活用は用言のどの活用と同じか。

問題 14 次の動詞に「れる」「られる」を附けてみ
て、その各々がどのような種類の動詞に附
くかを明らかにせよ。

取る 呼ぶ 見る 笑ふ 吠える 来る 喜ぶ
投げる 捨てる 打つ ほめる 稱讃する

○サ變の動詞には、その未然形「さ」に「れる」が附
いて「される」となる。但し、未然形「せ」に「ら
れる」が附いて「せられる」となることもある。

問題 15 助動詞「せる」「させる」に「れる」「られ
る」を附けてみよ。

言はせる 見させる

問題 16 「れる」「られる」は、動詞及び助動詞「せ
る」「させる」の、どんな活用形に附くか。

【六】(一) 追ひ越したり 追ひ越されたり しなが
ら、東海道を 歩き續けた。

お互に 助けたり 助けられたり する。

(二) 正午までには 頂上に 登られる。

夕方までには ありられる。

(三) 忘れようと しても、どうしても 思ひ出
される。

故郷の 母の ことが 案じられる。

(四) 野田先生が 先頭に 立たれ、石井先生が
みんなの あとから 來られた。

問題 17 右の「れる」「られる」に就いて、その表
す意味が同じかどうか考へてみよ。

【七】 例文(一)の「れる」「られる」は、受身即ち他か
ら動作を受ける意味を表す。

【八】 例文(二)の「れる」「られる」は、可能即ち「で
きる」といふ意味を表す。可能の意味を表す場合に
は命令形がなす。

【九】可能の意味を表すには、動詞に「れる」「られる」を附ける言ひ方のほかに、「登れる」といふ可能動詞を用ひたり、「おろることが出来る」のやうな言ひ方をする事が少くない。

【一〇】例文(三)の「れる」「られる」は、自發即ち動作が自然に起る意味を表す。自發の意味を表す場合には命令形がない。

【一一】例文(四)の「れる」「られる」は尊敬の意味を表す。尊敬の意味を表す場合には命令形がない。

【一二】尊敬の意味を表すには、動詞に「れる」「られる」を附ける言ひ方のほかに、尊敬の意味をもつ特別の動詞を用ひたり、又は「おいでくださる」「おいで遊ばす」「おいでなさる」「おいでになる」のやうな言ひ方をする事が多い。

問題18 次の語に對する尊敬の言ひ方を言へ。

来る 來い 行く 行け 居る 居ろ 書く 書け 讀む 讀め

【一三】「せる」「させる」に「られる」の附いて出來た「せられる」「させられる」は、「れる」「られる」よ

りも一層改つた尊敬の意味を表すことがある。

殿下には 隨員を 隨へさせられて、御渡御の御途に つかせられた。

問題19 次の文の「れる」「られる」は受身か、可能か、自發か、或は尊敬か。

(一) 先生は、仰げば 仰ぐほど 高く、接すれば 接するほど 奥深い お方だ。大きな 力で、ぐんぐんと 人を 引つぱつて 行かれる。とても、先生には 追いつけないから、もう よさうと思つても、やはり ついて 行かないでは ぬれない。

(二) 法隆寺が、千二百年後の今日まで、そのまゝ保存されてゐるのは、世界にも稀に見られることで、それによつても、當時の建築が秀れてゐたことも 思ひ合はされるのであります。

【一四】ないぬ(ん)

よく 氣をつけて 見ると、はつきり します。よく 氣をつけて 見ないと、はつきり しません。

ません。

右の言ひ方の違ひを考へてみよ。

(一) 松阪の 町の はづれまで 行つても、それらしい 人は 見えない。次の 宿の 先まで 行つて みたが、やはり 追いつけなかつた。

辭書が 買へなければ、辭書を 借りて 寫さう。

(二) 昔は 水田は 開けず、島の 作物は できず、所に よつては 飲み水にも 困る くらゐでした。

右のやうに「ない」「ぬ(ん)」は打消を表す。

問題20 「ない」の活用を調べて活用表を作れ。

問題21 「ない」の活用は、用言のどの活用と同じか。

【一五】「ない」を附けると「なくて」となるが、この「なくて」と同じ意味を表すのに「ないで」といふ形を用ひることがある。

「ぬ(ん)」は次のやうに活用する。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
ぬ	○	ず	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ぬ	○
主な用法		中止法	切言	ひびき	にべ	なるに

問題22 用言の活用に、この活用に似たものがあるか。

問題23 次の語に「なす」「ぬ」を附けよ。

飛ぶ 告げる 出る 見る 過ぐる 来る する 飛ばせる 來させる 讀まれる 見られる

問題24 動詞「ある」に、「なす」「ぬ」が附くか。

問題25 「なす」「ぬ」は、動詞及び助動詞「せる」「させる」「れる」「られる」のどんな活用形に附くか。

問題26 次の空白の箇所に適當な言葉を入れよ。

少しも 運動□ない。
少しも 運動□ぬ。

問題27 次の言葉の丁寧な言ひ方を言へ。

書かない 出させない 飛ばれない

問題28 次の文の「ない」は皆同じものかどうか。

(一) 徳のある 者なら、天が 助ける はずだ。助

けなし ところを見ると、先生は まだ 君子では ないのか——子路には、ひよつとすると、さう いふ 考へが わいたのかも 知れない。

(二) ここでは、武士の子も、農家の子も、へだてはなかつた。また松陰は、決して先生だといふ高慢な態度をとらなかつた。

問題 29 形容詞の「ない」と助動詞の「ない」とは、どういふところで區別されるか。

【III】

(一) 傾斜は、少くとも 四五十度以上は あらう。

ほう、お前が 世話を すると いふのか。よからう。

あと 四年で 明治維新の 幕が切つて 落されようといふ 時の ことです。

(二) はいつて みよう。さうして 一曲 ひいて やらう。

右の(一)の「う」「よう」と、(二)の「う」「よう」とを比べてみよ。(一)は話し手が他を推量する意味

問題 31 「う」「よう」は用言及び助動詞のどんな活用形に附くか。

問題 32 ナ行變格活用の「する」「勉強する」に「う」又は「よう」を附けてみよ。

【IV】 推量する意味を表す場合、動詞・形容詞の未然形に「う」「よう」を附けた言ひ方よりも、動詞・形容詞の終止形に「だらう」「でせう」を附けた言ひ方を用ひることが多い。

二 口語助動詞の接續と活用(一)

【I】

たい お預けた 品の お引渡しを 願ひたいと思ひます。

そんなに 歸りたければ、歸れ。

右のやうに、「たい」は、自身の希望する意味を表す。

問題 33 この活用を調べて活用表を作れ。

問題 34 この活用は用言のどの活用と同じか。

問題 35 次の語に「たい」を附けてみよ。

を表す。(二)は話し手の意志を表す。

「う」「よう」は語形變化がない。しかし、終止形として用ひられるほかに、次のやうな用法がある。

あらう。とか、あるまい。とか。

あれでは 承諾しよう。はずが ない。

但し、どの體言にでも連なるといふのではなく、或る種の體言に限つて連なるのである。

基本の形	未然形	通形	終止形	連體形	假定形	命令形
う	○	○	う	(う)	○	○
よう	○	○	よう	(よう)	○	○
主な用法			切る	ひく	連なる	

問題 30 「う」と「よう」とは、上に來る語によつて、いづれか一方が用ひられる。次の語に「う」「よう」を附けてみて、その各々がどのやうな種類の活用に附くかを明らかにせよ。

書く 起きる 投げる 來る よい 静かだ 行かせる 來させる 行かれる 來られる 知らない

書く 起きる 受ける 來る 勉強する 書かせる 見させる 知られる 見られる

問題 36 「たい」は動詞・助動詞のどんな活用形に附くか。

問題 37 「見たい」に「ございます」「存じます」を附けてみよ。

【II】

ます 昨日 おうかいひ 致しましたが、お留守で お目に かゝれませんでした。明日にでも 又 お訪ねして みます。

右のやうに、「ます」は、聞き手に對して、話し手が物を丁寧と言ふ場合に用ひる。

基本の形	未然形	通形	終止形	連體形	假定形	命令形
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ
主な用法	連なる	にタ	に言	ヒトキに	連なる	にタ

○假定形に「ば」をつけた形、即ち「ますれば」といふ言ひ方は、普通には用ひない。この場合は「ましたら」といふ形を用ひる。

あちらに 着きましたら、早速 手紙を 差し上げます。

問題 38 用言の活用は、この活用は似たものがあるか。

問題 39 次の語に「ます」を付けよ。

行く 見る 受ける 来る 勉強する 聞かれる 起きられる 知らせる 掛けさせる

問題 40 「ます」は、動詞及び助動詞のどんな活用形に附くか。

問題 41 「ます」の命令形「まし」(ませ)を次の語に附けてみて、附くか附かないか考へてみよう。

- (一) 言ふ 見る 受ける 来る する
- (二) おつしやる なさる いらつしやる

【五】 た(だ)

- (一) 今朝は 五時に 起きた。
 - (二) 授業は 今 すんだ。
 - (三) 壁に かけた 絵。
- 世界に すぐれた 文學。

に附くか。音便の形に附くのは何活用の動詞か。

【六】 さうだ

- (一) 行きさうだ。 行くさうだ。
- (二) 高さうだ。 高いさうだ。
- (三) 静かさうだ。 静かさうだ。
- (四) 知らないさうだ。 知らないさうだ。

問題 45 右の上段の「さうだ」と下段の「さうだ」は、意味の上でどう違ふか。

問題 46 上の語への続き方はどう違ふか。

問題 47 さけや、ますの 泳ぎ廻つて ゐさうな 場所を 探す。

だるさうに 歩いて ゐました。

さも くやしさうで ある。

右のやうに、この「さうだ」は、様態即ちさういふ様子だといふ意味を表す。

問題 47 様態の「さうだ」はどう活用するか。活用表を作れ。

右のやうに、「た」は、(一)過去を表し、(二)完了即ち動作又は事件が完結することを表し、(三)「てある」「てゐる」の意味を表す。

基本の形		未然形		連用形		終止形		連體形		假定形		命令形	
た	たら	○	た	た	たら	○							
主な用法	連なるに		切言	ひときに	連なるに	連なるに							

○假定形「たら」は、「ば」を伴はず、そのまゝで假定の意味に用ひる。

○「見たり聞いたり」の「たり」は、この助動詞の連用形ではなく、助詞である。

問題 42 用言の活用は、この活用は似たものがあるか。

問題 43 次の語に「た」を附けてみよう。

書く 騒ぐ 出す 立つ 死ぬ 飛ぶ 読む 笑ふ 取る 越える 来る 活動する 雄々しい 勇敢だ 行かせる 考へられる 起きます 話したい 知らない

問題 44 「た」は、用言及び助動詞のどんな活用形

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
さうだ						
主な用法	速なるに	速なるに	切言	ひときに	連なるに	連なるに

○假定形「さうなら」は、「ば」を伴はず、そのまゝで假定の意味に用ひる。

問題 48 この活用は用言のどの活用と同じか。

問題 49 様態の「さうだ」は、動詞・形容詞・形容動詞のどんな活用形、又はどんな形に附くか。助動詞にはどうか。

○形容詞の「よい」「ない」に「さうだ」が附く場合は、「よさうだ」「なさうだ」となる。

この 辭書は よさうだ。

元氣の なさうな 若い 男が、靴を 縫つてゐる。

但し、助動詞の「ない」の場合は「知らないさうだ」である。

問題 50 その 他の 山々も 見えるさうだが、今日は 何も見えない。

そこは 大變 暑さうだ。

皆さん お元気ださうで 安心しました。
この「さうだ」は傳聞を表す。傳聞の「さうだ」は、次のやうに活用する。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
さうだ	○	さうで	さうだ	○	○	○
主な用法		連アルに切言	るひ			

問題50 傳聞の「さうだ」は、用言及び助動詞のどんな活用形に附くか。

【III】 まい

(一) 自分とても、かれらを 法衣の 袖にくるんで 助けたいの は 山々で あるが、それは かへつて かれらの 心で あるまい。
その 話は 誰も 知るまい。
(二) 私は 参りますまい。

それに つけても、御主君、尼子家の 御恩を 忘れまいぞ。

右のやうに「まい」は、(一)打消、と推量とをかねた

る「させる」「れる」「られる」には、その未然形に附く。

問題52 次の空白の箇所に適當な言葉を入れよ。
今度は 多分 失敗□まい。
かれも もう なまけは □まい。

三 口語助動詞の接續と活用 (三)

【III】 やうだ

音楽が 流れるやうに 聞えて 來た。
形は すぐはうりのやうで、味は 熟し柿そつくりの マンゴー。じやがいのものやうな かつかうで 砂糖のやうに あまい サオ。
何を 言つたのか かれ自身にも わからないやうだつた。

北國では もう 雪が 降つたやうだ。
もし 東京へ 歸るやうなら、これを持って 行つて くれ。

そのやうな ことでは 成功は 覺つかない。
右のやうに「やうだ」は、他にたとへて言ふのに用

意味を表し、また(二)意志を表す。

「まい」は「う」「よう」と同じく語形變化がない。しかし、終止形として用ひられるほかに、次のやうな用法がある。

あらう ことか、あるまい ことか。
但し、どの體言にでも連なるといふのではなく、或種の體言に限つて連なるのである。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
まい	○	○	まい(まい)	○	○	○
主な用法		切言	るひ(コトに連なる)			

問題51 次の語に「まい」を附けてみよ。

(一) 書く 読む 行きます
(二) 起きる 受ける 来る 旅行する 行かせる
來させる 行かれる 來られる

「ます」は、四段活用助動詞には、その終止形に附く。上二・下一・カ變の動詞には、その未然形に附く。サ變の動詞には、未然形の「し」に附く。また「まい」は助動詞「ます」には、その終止形に付き、「せ

ひ、また不確かな断定を表すのに用ひるが、そのほか、例示に用ひることがある。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
やうだ	やうだら	やうだつ	やうだ	やうな	やうなら	○
主な用法	連なるにアルに連なるに切言	連アルに切言	るひ	連なるに(連なるに)		

○假定形「やうなら」は、「ば」を伴はず、そのまゝで假定の意味に用ひる。

問題53 この活用は用言のどの活用と同じか。

問題54 次の語に「やうだ」を附けてみよ。
飛ぶ 延びる 消える 来る 練習する 悪い
柔かだ 行かない 過ぎた 切られる

問題55 「やうだ」は、用言及び助動詞のどんな活用形に附くか。

問題56 用言及び助動詞のほか、どんな語に附くか。

【III】 らしい

あれは 學校らしい。

開會は 九時かららしい。

簡単に 解決するらしく 思はれた。

問題は やさしいらしい。

昔は かなり 賑やかだった。

さも 驚いたらしい やうすだ ある。

右のやうに、「らしい」は、推定する意味を表す。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
らしい	○	らしく	らしく	らしく	○	○
主な用法	タ・ナル言に連なる切					

問題 57 用言の活用に、この活用に似たものはな
いか。

問題 58 「らしい」はどんな品詞に附くか。

問題 59 次の語に「らしい」を附けてみよ。

書く 見る 教へる 来る 旅行する よい 柔
かだ 書かせる 見られる 見たい 見ない 見た

問題 60 「らしい」は動詞・形容詞・形容動詞のど
んな活用形、又はどんな形に附くか。助動
詞にはどうか。

右のやうに、「だ」「です」は、断定する意味を加へ
て述語の文節を作る。

問題 63 「だ」と「です」は、共に断定の助動詞で、

あるが、意味の上でどんな違いがあるか。

問題 64 「だ」「です」は、右の例文ではどんな品
詞に附いてゐるか。

「だ」は次のやうに活用する。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
だ	だら	で	だ	(な)	なら	○
主な用法	ウ言に連なる切					

○假定形「なら」は、「ば」を伴はず、そのまゝで假
定の意味に用ひる。

○連體形「な」は、助詞「の」「で」「のに」に連な
る場合だけに用ひる。

山は 今 春だ。

春なので、一面に 花が 咲き亂れて ゐる。

もう 春なのに 風は なか／＼ 冷たい。

なほ、この「のに」は、終止形「だ」から連なるこ
ともある。

問題 61 「行くらしい」に「ございます」を附けて
みよ。

問題 62 接尾語にも「らしい」といふのがある。

次の文の「らしい」は、助動詞か接尾語か。

暗くて よく わからないが、どうも 子供らしい。

あの 男は いつまで たつても 子供らしい。

〔云〕 だ です

月は 死の 世界だ。

今日は、あの 山より もつと 高く 登るの
だ。

生物に とつて、太陽ほど ありがたい もの
があるだらうか。

何と いふ うるはしい 友情だつたらう。

私が 浦島なら、玉手箱は あけなかつたでせ
う。

ここは、學校です。

この 木の 汁を 集めて 固めると、ゴムが
出来るのです。

たい 泣くばかりでした。

問題 65 用言の活用に、この活用に似たものはな
いか。

問題 66 形容動詞の語尾變化と比べてみよ。どの
點が違ふか。

「です」は次のやうに活用する。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
です	で	せ	で	す(です)	○	○
主な用法	ウ言に連なる切					

○連體形「です」は「の」「で」「のに」に連なる場合だけ
に用ひる。

お天気です。で、今日は 山に 登りたいと思
ひます。

お天気です。のに、どうして お出かけに ならな
いのですか。

問題 67 用言の活用に、この活用に似たものがあ
るか。

「だ」「です」は、體言や或る種の助動詞に附く。但
し、その未然形に助動詞「う」の附いたもの、及び

「なら」は、「行くだらう」「白いでせう」「行くなら」

「白いなら」のやうに動詞・形容詞にも附く。

「です」は、形容動詞及び助動詞「さうだ」「やうだ」には、「静かです」「勇敢です」「さびしさうです」「出かけるさうです」「山のやうです」のやうに、その語幹に附く。

〔二七〕口語の助動詞は、大體右に述べた通りである。さうして、以上は、どんな種類の語又はどんな活用形を受けるかによつて、順序立てたものである。

問題68(イ) 用言だけに附くのは、どの助動詞か。

(ロ) 動詞だけに附くのは、どの助動詞か。

(ハ) 動詞のほか、形容詞にも附くことのできるのは、どの助動詞か。形容動詞に附くことのできるのは、どの助動詞か。

問題69(イ) 用言及び助動詞の未然形に附くのは、どの助動詞か。

どの助動詞か。

(ロ) 連用形に附くのは、どの助動詞か。

(ハ) 終止形に附くのは、どの助動詞か。

問題70 用言及び助動詞以外の語に附くことのできるのは、どの助動詞か。

〔二八〕すでに調べて来たやうに、助動詞には、いろいろ活用の違ったものがある。その活用の仕方に基づいて、助動詞を幾つかの類に分けることができる。

問題71(イ) 動詞と同じ活用、又はこれに準ずる活用をするものはどれか。それは、動詞のどの種類の活用と同じか。

(ロ) 形容詞と同じ活用、又はこれに準ずる活用をするものはどれか。

(ハ) 形容動詞と同じ活用、又はこれに準ずる活用をするものはどれか。

(ニ) 用言とは違った特殊の活用をするものはどれか。

(ホ) 語形の變らないものはどれか。

〔二九〕吾輩は猫である。

尖つてゐる帽子。

右の「猫である」は「猫だ」「尖つてゐる」は「尖つた」と同じ意味である。即ち、この「である」が助動詞「だ」に、「てゐる」が助動詞「た」に當るので

きめた。

(一) かう なつては、おまへたちには、とても かな はない。私も 覺悟をした。私は 樂人である。今、ここで、命を 取られるのだから、この世の 別れに、一曲だけ 吹かせて もらひたい。

(二) これが、名人といはれた 自分の 最後の曲だと 思つて、用光は、靜かに 吹き始めた。曲の 進むにつれて、用光は、自分の 笛の音によつたやうに、たゞ 一心に 吹いた。

(三) 和尙さんは、どんなに、さびしかつたらうと思つて、急いで行つて見ると、びつくりしました。大きなねずみが一匹、雪舟の足もとにゐて、今にも飛びつきさうなやうです。かまれては、かはいさうだと思つて、和尙さんは、「しつ、しつ。」と追ひましたが、ふしぎに、ねずみは、じつとして動きません。

問題73 次の文に誤りがあつたら正せ。

(一) その 夜は、まんじりとも しず、机に 向かつて かの 曲を 諸に 書きあげた。

あつて、「である」「てゐる」が助動詞のやうな働きをしてゐることがわかる。即ち、「猫である」「尖つてゐる」は、文節からいふと二文節であるが、この二文節で、他の場合の一文節に當るやうな働きをしてゐるのである。このやうに、二文節で他の場合の一文節に當るやうな働きをしてゐるものは、このほかにもある。

新聞を 読んで いらつしやる。

机の 上に 本が 置いて ある。

どうか 話して ください。

ちめざめに なる。

しるしを 附けて おく。

書いて しなふ。

ためしに やつて みる。

問題72 次の文から助動詞を抜き出し、その活用の仕方を示せ。

(一) 用光は、逃げようにも 逃げられず、戦はうにも 武器が なかつた。とても 助けぬと 覺悟を

- (二) 孝行せうと思ふ時に親は ないの 歎きを せないやうに せなければ なりません。
- (三) よもや 失敗は するまいと 思うが どうだろう。
- (四) 描こうにも 描きようが ないのです。
- (五) 今までの ことは しょうが ない。これから 注意しやうね。
- (六) まねて 作らふと しても、ちよつと できそう にも ない。
- (七) 私が 身代りに 立ちとう ごさいます。

四 口語助詞の種類と用法

- 〔一〕 戸が あく。 〔學力が 増す。 戸を あける。 〔學力を 増す。
- 〔二〕 私は 参りません。弟は参ります。
- 〔三〕 私は 参りませんが、弟は参ります。
- 〔四〕 私でも 馬に乗れます。
- 〔五〕 これは あなたの 本です。
- 〔六〕 これは あなたの 本ですが。

〔三〕 第一類

- 〔一〕 鳥が 鳴く。 頭が痛い。
- 〔二〕 説明が 丁寧だ。 正直なのが 取り柄だ。
- 〔三〕 水が 飲みたい。 本が 欲しい。
- 〔四〕 字が読める。 勉強するのが 好きだ。

〔一〕 冬の 風が 吹く。

母としての 慈愛。 朝の 爽かな 空氣。

私の 讀んだ 雑誌。 故郷からの 便り。

お茶の 飲みたい かた。 人の ぬない 島。

英語の 話せる 人。

燕の 飛ぶのは 早い。 新しいのが よい。

きれいなのを ください。

これは 私のです。

君が さう 言つたのか。 はい、私が さう 申

したのです。

○この「の」が「だ」「です」に連なる場合には、時に

「ん」となることがある。

網の 網を しつかり つないで おくんぞ。

を

〔一〕 手紙を 書く。

讀書を 好む。

〔二〕 門前を 通る。

〔三〕 基地を 出發する。

懐かしい 故國を 離れる。

卵を 産む。

美しいのを 買う。

つり橋を 渡る。

〔五〕 勇が 正雄に 本を 與へた。

問題1 右の例文に就いて、助詞がどのような働

きをしてゐるか、考へてみよう。

問題2 右の例文の助詞は、どんな品詞に附いて

ゐるか。

このやうに助詞は、語に附いてその語と他の語との關係を示し、或はこれに一定の意味をそへる。故に助詞に於いては、どういふ語に付き、どういふ語にかゝつて行くかを明らかにすることが大切である。この點から助詞を類別すると、大體四種類になる。

に

〔一〕 室内に ゐる。 山に 咲く。

朝 五時に 起きる。

〔二〕 大阪に 着く。 上空に 達する。

〔三〕 學者に なる。

〔四〕 見學に 行く。 醫者を 呼びに やる。

〔五〕 雨に 降られる。 弟に 本を 讀ませる。

〔六〕 南へ 向かふ。 奥へ 進む。

〔七〕 ここへ 來い。 棚へ 載せる。

〔八〕 これは あなたへ あげませう。

と

〔一〕 弟と 遊ぶ。 をむさんと 出かける。

〔二〕 政治家と なる。

〔三〕 宜しくと 言つた。

〔四〕 明日は 歸るだらうと 思ふ。

〔五〕 筆と 紙とを ください。

〔六〕 電車と 自動車と 走る。

から

「ここから」出發します。

大陸の旅行から歸る。

一時から始ります。頂上からの展望。

「私から」一同に申し傳へませう。

「出かけてから」心配だ。

より

「女は男より」丁寧な言葉を使ふ。

「さうするより」仕方がない。

て

「筆で」書く。汽車で歸る。

「庭で」遊ぶ。田舎で生まれました。

俳句でこれを「雲の峯」といふ。

「雨で」も困りでせう。

友達のこと、迷惑した。

や

馬や牛が飼つてある。

針や、かすがひを打つ。

問題3 この類の助詞は、どんな品詞に附くか。

また、どんな語にかゝつて行くか。右の例

文に就いて調べてみよう。

問題4 用言に附く時は、どんな活用形に附くか。

問題5 助詞に附く時は、どんな助詞に附くか。

この類の助詞は、主として體言に附いて、その體言が、同じ文中の他の語に對して、どんな關係に立つかを示すものである。これを格助詞といふことがある。

「三」 第二類

ば

「讀めば」わかる。よければ買はう。

「風が吹けば」波が立つ。

「魚も」とれば、狩もした。木も切れば、網も

すいた。

と

「讀むと」わかる。

「風が吹くと」波が立つ。

「家へ」歸ると、日が暮れた。

種をまくと、かはいの芽を出した。

「どう」ならうと、かまはない。

のに

よせと、ふのに、やめなう。

こんなに寒いのに、それでも薄着でゐる。

いつもひまだ(な)のに、どうして来ないのだらう。

ので

雨が降るので、遠足はやめた。

道が遠いので、骨が折れる。

あたりが静かなので、よく聞える。

から

雨が降るから、遠足はやめた。

道がけはしいから、骨が折れる。

計算が困難だから、正確にはわかりません。

負けても、よいから、しまひまで走れ。

問題9 第一類の「から」と、どう違ふか。

し

雨も降るし、風も吹く。

夏は涼しいし、冬は暖かい。

て(て)

問題6 第一類の「と」と、どう違ふか。

ても(でも)

見てもわかるまい。

をかしくても、笑はない。

いくら呼んでも、返事がなかった。

問題7 「でも」となるのはどういふ場合か。

けれど(も)

降つてゐるけれど(も)、大したことはない。

少し寒いけれど(も)、がまんしよう。

花も、きれいだけれど(も)、第一にほひがよい。

が

「つらいが」がまんしよう。

風は吹くが、寒くはない。

「運動も」するが、勉強もする。

問題8 次の文の「が」を區別せよ。

萬葉集には、短歌が、多いが、後世の歌集に、比べて、長歌の、多いのが、二つの、特色となつてゐる。

「見て」来る。赤くて美しい。

飛んで、来い。

「雨が降つて」ゐる。

どうぞ見てください。

動かないでください。

「雨が降つて」行けなかつた。

問題10 「で」となるのはどういふ場合か。
ながら

「泣きながら」歌ひ、歌ひながら泣いた。

「幼いながら」よく働く。

知つてゐながら教へない。

たり(だり)

子供たちが出たりはいつたりして遊んでゐる。

飛んだりはねたりする。

問題11 「だり」となるのはどういふ場合か。

問題12 この類の助詞はどんな品詞に附くか、右

の例文に就いて一々調べてみよ。

問題13 この類の一々の助詞に就いて、それが、

痛くもかゆくもない。

子供も泣き、大人も泣いた。

こそ

「私こそ」失禮しました。

「泳ぎを」知つてゐたからこそ助つたのだ。

さへ

「水さへ」のどに通らない。

「手にさへ」取らない。

「湯さへ」あれば結構です。

「行きさへ」すればよいのだ。

「杖とも」柱とも頼む一人子にさへ別れた。

「神の尊ささへ」感じられた。

でも

子供でも知つてゐる。

私にでもできます。

こはれでもすると困る。

乗物がなければ、歩いてでも行く。

しか

五時間しか寝ない。

用言及び助動詞のどんな活用形に附くかを言へ。

この類の助詞は、用言や助動詞に附いて、上の語の意味を、接續詞のやうに、下の用言又は用言に準ずるものに續けるものである。これを接續助詞といふことがある。

「四」第三類

は

「私は」知りません。鯨は魚ではない。

寒くはないか。

この池には魚がゐない。

太陽は東から出る。

それほど偉い人とは思はなかつた。

知つてはゐるが、教へられない。

も

「私も」知りません。

五尺もある厚い氷。

寒くもない。私にもください。

「足も」手も顔も、ほこりにまみれる。

さうとしか考へられない。

太陽でも月でもおぼろにしか見えない。

まで

「ここまで」来い。十二時までかゝつた。

「子供にまで」笑はれる。

ばかり

「二時間ばかり」休んだ。

「目先の」ことはかり考へてゐる。

きれいなばかりで何の役にも立たない。

だけ

「それだけ」読めれば十分だ。

「できるだけ」手を盡くした。

「私だけが」知つてゐる。

「見ただけで」歸つた。父にだけ話した。

問題14 次の文の意味は同じかどうか。

「私だけが」聞いてゐる。

「私しか」聞いてゐない。

ほど

三分の二ほどが出来上つた。

行けば 行くほど けはしくなる。
今までほどは、寒くは、あるまい。

くらゐ(ぐらゐ)

「私でも 給ぐらゐは 描ける。」

遊びにぐらゐ 来ても よからう。

「その 大きさは ぼくらの 頭を おほふくらゐ
です。」

など

絵などを 描いて 遊ぶ。

なら かへでなどの 木々。

病人が この 寒空に 出かけるなど とんでも
ない。

なり

「せめて 私になり 知らせて いたゞきたかつ
た。」

「あなたなり 私なり、誰か 残つて ゐませう。

行くなり やめるなり、早く おきめなさい。

やら

「誰やらが 言つてゐた。 誰にやら 渡した。」

できる。その例を挙げよ。

【五】 第四類

か

「お前も 見たいか。」

「そんな ことが あるものが。(あるものですか。)

問題18 第三類の「か」と、どう違ふか。

問題19 次の「か」を區別せよ。

「どうしました。子供たちと、言ひ合ひでもしたの
ですか。」と言ひながら 見あげた 尼さんの 顔
は、この 子と どこか、似た ところがある。

な

一人も にながすな。 この 光榮を 忘れるな。

決して 御心配くださいますな。

な(あ)

うれしいな(あ)。 愉快だな(あ)。

天氣が くづれるなと 思はせるのが この 雲
だ。

問題20 次の「な」を區別せよ。

降りさうだなと 思つたが、そのまゝ 出かけようと

文法篇

「珍しいやら 楽しいやら、まるで 夢のやうだ。」

か

「誰かに 聞いて みよう。」

腰掛が 何臺か ある。

いつか 行きたいと 思ひます。

どう したのか、その 子は 急に 泣き出した。

大陸の 氣候は 私に 合ふのかも 知れません。

「父か 母(か)が 參上します。」

電話を かけるか 使ひを やるか します。

朝顔雲とか かなと云とか いびます。

問題15 この類の助詞はどんな品詞に附くか。例
文に就いて調べてみよう。

この類の助詞は、概して、體言や用言、その他いろ
いろの語に附いて、副詞のやうに、下の語にかゝつて
行くものである。これを副助詞といふことがある。

問題16 第一類の助詞と第三類の助詞の或るもの
は、これを重ねることが出来る。その例を
挙げよ。

問題17 第三類の助詞は、互に重なり合ふことが

すると、「傘を 忘れるな。」と 兄が 言つた。

ぞ

そら 行くぞ。 なか／＼ つらいぞ。

きつと 大漁だぞ。

とも

勉強するとも。 それは 美しいとも。

よ

さあ、運動だよ。 雨が また 降るらしいよ。

ね

それはね、 大變でしたよ。

相變らず 勉強して ゐるね。

さ

勉強するさ。

それがさ、うまく、行かないんだよ。

問題21 この類の助詞はどんな品詞に附くか。例
文に就いて調べてみよう。

この類の助詞は體言や用言その他いろ／＼の語に
附き、文の終りにあつて、疑問・禁止・詠歎・感動
などを表すものである。これを終助詞といふことが

ある。これらのうち「ね」「さ」は文の中にも用ひる。

問題 22 證言又は證言に準ずるものにだけ附く助

詞には、どんなものがあるか。

問題 23 用言及び助動詞にだけ附く助詞には、ど

んなものがあるか。

問題 24 用言及び助動詞に附くことのできる助詞

には、どんなものがあるか。

問題 25 用言に附く助詞に就いて、用言のどの活

用形に附くかを調べてみよ。

〔六〕 今まで調べて来たことによつて、口語では品詞が幾つあるかといふこと、單語には活用のあるものと無いものがあること、活用の有る單語はどのやうに活用するかといふこと、單語には自立語と附屬語とがあつて、自立語と附屬語とが結びつく時どのやうな結びつき方をするかといふことなどが、わかつたはずである。

(第一表) 口語助動詞活用表

種類	語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	接續
型 詞 動								
型 詞 容 形								
型 詞 動 容 形								
特 殊 型								
語 形 變 化 の も の								

	動詞	未然形	用言
	形容詞		
	動詞	連用形	言
	形容詞		
	動詞	終止形	に
	形容詞		
	動詞	連體形	
	形容詞		
	動詞	語幹	
	形容詞		
	動詞	以外に	用言
	形容詞		

(第三表) 口語助詞接續表

類一第	類二第	類三第	類四第	體言に	
				連用形	用言に
				終止形	
				連體形	
				假定形	

「文語」

一 文語とその文法

「一」口語に對して、文字で書く時だけに用ひる文語といふものがある。畏れ多いことであるが、詔勅の文章は文語である。又、法令の文章や官廳の公用文、或は諸種の記録等も、文語で書くことが多い。手紙を書く時には、いはゆる候文を用ひることが少なくないが、この候文も文語の一種である。

- (一) 廣く會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
- (二) 右ノ者入學ヲ許可ス
- (三) 境内ニ於テ魚鳥ヲ捕ルベカラズ
- (四) この地も三月に入りてより寒氣もゆるみ、しのぎやすく相成り、皆喜び居り候。故郷の猪苗代湖畔には、未だに尺餘の白雪もあるべく、冬籠りの窮屈しみくんと御察し申上げ候。
- (五) 鳥々に灯をともしけり春の海

に、口語的な言ひ方を混用することは決してない。

「三」口語と文語との違ひは、主として文法の點にある。口語に口語の文法があるやうに、文語には文語の文法がある。

「四」文語は、昔の人が文章を書く場合に用ひた言葉を受け傳へたものである。随つて、文語の文法を知つてをれば、昔の文章を読むのに役に立つ。しかし、文語の文法と、昔の文章の文法との間には、多少違つた所もあつて全く同じではなく、又、昔の文章でも、時代や種類の違ひによつて、多少の相違がある。

「五」文語に於いても、言葉は常に文として現れる。文は文節から成り、文節は單語から成り立つ。單語は、それだけで文節となることのできる自立語と、常に自立語に附いて始めて文節となる附屬語とがある。さうして、自立語及び附屬語に、それ／＼活用の有るものと無いものがある。

問題 2 (イ) 何か文語の文章を一つ選び、それに就いて、一々文節に分けよ。

(六) 雪降れば山よりくだる小鳥多し障子のそとにひねもす開ゆ

右はいづれも文語で書いたものである。

問題 1 文語の用ひられるいろ／＼の場合を考へてみよ。

このやうに、文語は、口語と共に私どもの周圍に現に行なはれてゐるものである。随つて、文語を理會し、文語を書き得ることは、私どもにとつて大切なことと言はなければならぬ。

- 「二」 (一) 佛の慈悲によつて、助ける道でもあらばといふ下心であつたらう。
- (二) いやしくも男と生まれた以上、萬代に傳ふべき名も立てないで、どうして空しく死なれようか。
- (三) 昂然たる態度で自己の信ずるところを述べた。

右の文の傍線を附けた部分は、文語的な言ひ方である。このやうに、口語の文章の中に、文語的な言ひ方を混せて用ひることがある。但し文語の文章の中

(ロ) 更に單語に分けて、自立語と附屬語とを區別せよ。

(ハ) 活用の有る語を挙げよ。

二 自立語で活用の有るもの

午前 春陰、午後 春雨、暖かにして のどかに、且つ 静かなり。

逗子の 梅は 多く、古いぬ。八幡の 林には、子を 負ひたる 老婆、松葉、松かさ 枯枝を 拾ひつゝ、あり。

村より 野に 出づれば、麥の 緑 著しく 深く なりて、野邊の 枯草も 緑 斑らに 崩れ 出でぬ。雨 そいゝに しぶきて、神武寺の 山 青く かすめり。

「一」右の文中、傍線を附けた語は、いづれも自立語であつて活用が有り、單獨で述語となることのできるものである。即ち、これらは用言である。文語の用言と口語の用言とは、活用の上でかなりの違ひがある。

【二】今、右の傍線を附けた語の言ひ切りになる時の形を挙げると、次のやうになる。

暖かなり のどかなり 静かなり 多し 老ゆ
負ふ 拾ふ あり 出づ 著し 深し なる
斑らなり 萌え出づ そぞろなり しぶく
青し かすむ

問題1 右の文語用言は、口語ではどう言ふか。

言ひ切りになる時の形で言へ。

問題2 右の文語用言に就いて、その語が口語では、(イ)動詞であるもの、(ロ)形容詞であるもの、(ハ)形容動詞であるものを區別せよ。

問題3 (イ)の類の文語用言はどんな音で終るか。(ロ)の類、(ハ)の類はどうか。

口語で動詞に属する語は、文語でも動詞である。文語の動詞も、口語と同様ツ段の音で終る。但し、口語動詞「ある」は、文語では「あり」であつて、これだけが例外となる。

口語で形容詞に属する語は、文語でも形容詞であ

あがりぬ。

あ、多年の 苦心は、つひに 報いられた。かれは、一枚の 皿を 両手に さへげて、しばし かま場に こをどしぬ。

喜三右衛門は、やがて 名を 柿右衛門と 改めたり。

【一】右の文中、傍線を附けた語は、いづれも自立語であつて活用の無いものである。活用の無い自立語は、文語と口語とで用ひる單語に違ひがあるが、文法上の性質は大體同様である。

問題1 口語では、活用の無い自立語にどんな種類があるか。

【二】日 輝く。

山 青く かすむ。

問題2 右の文を口語に改め、文語と口語とでどんな點が違ふか言へ。

問題3 口語では、主語にどういふ助詞を用ひるか。

右の文で「輝く」「かすむ」はそれ／＼述語であ

文法篇

る。文語の形容詞は「し」で終る。

口語で形容動詞に属する語は、文語でも形容動詞である。文語の形容動詞は「り」で終る。

このやうに、文語でも、用言は動詞・形容詞・形容動詞の三種に分れる。さうして、これらはそれぞれ特有の活用をもつてゐる。

三 自立語で活用の無いもの

その 夜、喜三右衛門は、かまの かたはらを離れざりき。鶴の 聲を 聞きては、はや 心も心に あらず。かまの 周圍を、ぐる／＼とめぐり歩きぬ。

夜は、やうやく 明けはなれたり。胸を をどらせつゝ、やをら かまを 開かんと すれば、今しも 朝日、はなやかに さし出でて、かま場を 照らせり。

「つ また」つ、血走る 眼に 見つめつゝ、かまより 皿を 取り出しわたる かれは、やがて「あゝ。」と 力 ある 聲に 叫びて、立ち

る。これに對する主語は「日」「山」である。即ち、文語では、口語の場合のやうに、「が」などの助詞を伴なつて主語となすとは限らず、助詞を伴はないで主語となることも少くない。「日」「山」は、このやうに主語として用ひられるから、體言即ち名詞である。體言は「を」「に」「へ」等の助詞をとることができる。

問題4 この章の初めの例文中から體言を抜き出せ。

【三】「その夜」の「その」は、口語では、いつも「その」といふ形でしか用ひられないので、これを一つの單語と認め、連體詞とする。ところが文語では、

そは、柿右衛門の 作りし 皿なり。

そを、賜はりたし。

のやうな言ひ方がある。故に「そ」だけを一つの單語と認め、それに「の」「は」「を」などの助詞が附くと考へなければならぬ。同様に、口語連體詞の「この」「わが」なども、文語では「こ」「わ」に「の」「が」が附いたものと見なければならぬ。さうし

て、「そ」「こ」「わ」などは、「が」「の」などの助詞を作なつて主語として用ひられるから、これらも體言である。

〔四〕體言にいろいろの種類のすることは、口語の場合と同様である。

問題5 口語では、體言にどんな種類があるか。

〔五〕文語で普通に用ひる代名詞は次の通りである。

自稱	對稱	他稱			不定稱
		近稱	中稱	遠稱	
わ われ おのれ	な なんぢ	こ これ	そ それ	か かれ	た たれ
		こ これ	そ それ	か かれ	い いづれ
		こ ここ	そ そこ	か かしこ	い いづく
		こ こち	そ そち	あ あなた	い いづち
		こ こなた	そ そなた	あ あなた	い いづかた
					方 方角
					場 場所
					事 事物
					人

問題6 以上のほか、文語にどんな代名詞があるかを考へてみよ。

汝 須ら 學問に 精進すべし。
まさに 壯途に つかむとす。

われ 誠に 勞を 惜しまむや。

いづくんぞ 二朝に 仕へむや。

よも 知らじ。

必ずしも 反對する ものに あらず。

用意をさく 怠り なし。

瀧の 音は 恰も 百雷の 一時に 落つるがごとし。

千木の ほとりを 飛ぶ 鳩の さながら 雀のごとく 見ゆ。

なにとぞ 御來臨 なし下された。候。

〔九〕文語で連體詞と認められるものは、「或る」「あらゆる」「いはゆる」などである。

〔一〇〕活用の無い自立語には、主語にも述語にもならず、修飾語にもならないものがある。これには、前の言葉を受けて後に結びつける役目をするもの即ち

接續詞と、他の文節とは餘り關係がなく、比較的獨立して用ひられるもの即ち感動詞とがある。感動詞

文法篇

問題7 例文中の體言を、普通名詞・固有名詞・數詞・代名詞に分けよ。

〔六〕主語とならないものの中には、それだけで修飾語として用ひられるものがある。さうして、その中に、用言を修飾するもの即ち副詞と、體言を修飾するもの即ち連體詞とがある。

問題8 この章の初めの例文中から副詞を抜き出して、さうして、一々の副詞がどの語を修飾してゐるかを示せ。

〔七〕副詞は用言を修飾するばかりでなく、(一)他の副詞を修飾したり、(二)或る種の體言を修飾したりすることがある。

(一) なほ しばし 試みよ。
(二) 日は やい 西に 傾けり。
たゞ 一人にて 成し遂げたり。

これは、程度を表す副詞に限つて見られるものである。

〔八〕又、或る種の副詞は、これを受ける語に一定の言ひ方を要求する。

問題9 この章の初めの例文中から接續詞を抜き出せ。又感動詞を抜き出せ。

〔二〕かれの 私財は 既に 盡きたり。しかも、この 救済事業は 中止すべきに あらず。よつて あまねく 世人に 訴へて 寄附を 募らむとせり。

日 既に 暮れぬ。されど 宿るべき ところも なし。

かれは 政治家にして 且つ 教育家なり。京都 及び 奈良は 日本の 舊都なり。

これらはいづれも接續詞である。文語で普通に用ひる接續詞には、なほ次のやうなものがある。

さらば されば かくて 随つて
或は 又は もしくは
但し もつとも さはれ 然れども 然るに
並びに 又

問題10 次の傍線を附けた語は、副詞か接續詞か。

副詞の場合には、何を修飾するかを示せ。

(甲) 昨日 渡りし 河の上流を、今日 また 越ゆ。

(乙) 進んで 河を 渡り、また 山を 越ゆ。

(甲) 八合目より 九合目までの 道は もつとも けはし。

(乙) 山道は 頗る 急なり。もつとも 中腹までは 馬背の 便 あり。

(甲) かれの 言、或は 眞ならむ。

(乙) かれは、相撲 或は 柔道に 熱心なりき。

(甲) 期限までには なほ 三日 あり。

(乙) 本日の 議會は 五時に 終れり。なほ 明日 より 休合に 入る。

(三) あつばれ、名馬。誰の 馬ぞ。

いな、われらが 知る ところに あらず。

いで、大船を 乗り出して、われは 拾はむ、海の 富。

やよ、正行、汝は 父の 教訓を 忘れたるか。すは、洪水ぞ。

四 附屬語で活用の有るもの

樺太は 島なりや、又 大陸の 一部なりや、世界の 人の 久しく 疑問とする ところなりしが、その 實地を 探検して これが 解決を 與へたるは、實に わが 開宮林藏なり。

文化五年 四月、林藏は 幕府の 命によりて、松田傳十郎と 共に 樺太に 渡り、海岸を 探りて ぼや 島なる ことを 知りぬ。されど、なほ 心に 満たざる もの あり、同年 七月、單身にて 又 樺太に おもむけり。

先づ 樺太の 南端なる 自主にて 土人を やとひ、小舟に 乗りて 北に 進む。途中の 困難 名狀すべからず。

〔一〕 右の文中、傍線を附けた語は、附屬語であつて活用の有るもの、即ち助動詞である。

問題 1 右の例文中の二々の助動詞に就いて、それらがどんな品詞に附いてゐるか、調べてみよ。

これらは、いづれも感動詞である。文語で普通に用ひる感動詞には、なほ次のやうなものがある。

あゝ あはれ あな あはや
いざ や いかに おう

問題 11 次の文から副詞・接續詞・感動詞を抜き出せ。副詞は何を修飾するかを示せ。

(一) 一切經は、佛教に 關する 書籍を 集めたる一大叢書にして、この 教へに 志 ある 者の無二の 寶として 尊ぶ ところなり。しかもその 卷數 幾千の 多きに のほり、これが出版は 決して 容易の 業に あらず。されば古は、支那より 渡來せる もの 僅かに 世に 存するのみにて、學者 その 得がたきに 苦しむたりき。

(二) 鐵眼大いに喜び、まさに出版に着手せむとす。たまたま大阪に出水あり。死傷頗る多く、家を流し、産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知らず。

(三) あないとはし。このあかつき、城の内にて管絃したまひつるは、この人々にておかしけり。やさしかりける人々かな。

〔二〕 助動詞は、右の例文で知られるやうに、川言や他の助動詞に附いていろ／＼の意味を加へる。又、例文中の「なり」や、

かれは 有數の 藏書家たり。

往事を 思へば 夢のごとし。

の「たり」「ごとし」のやうに、直接に、又は「の」を介して體言に附き、その文節を述語とする働きをなすものもある。

五 附屬語で活用の無いもの

春は 島 山 霞に 包まれて 眠るがごとく、夏は 山 海 皆 緑にして 目ざむるばかり鮮かなり。兩岸 及び 島々、見渡す 限り 田園 よく 開けて、さうせんを 敷けるがごとく白壁の 民家 その 間に 點在す。

海の 静かなる ことは 鏡のごとく、朝日夕日を 負ひて 島がくれ行く 白帆の 影ものどかなり。月影の ささ波に 碎け、漁火の波間に 出沒する 夜景も、また 一段の おも

女
法
篇

問題 7 次の語は、いづれも文語に於いて四段に活用する動詞である。活用させてみよう。

動く 清ぐ 示す 立つ 教ふ 學ぶ 望む 祈る

問題 8 右の語は、口語では何活用に入るか。

○文語四段活用の動詞は、カ・ガ・サ・タ・ハ・バ・マ・ラの各行にある。

〔四〕 口語で四段に活用する「死ぬ」は、文語では次のやうに活用する。

花の下にて われ 死なむ。
その人はやく 死にたり。
朝に 生まれ 夕べに 死ぬ。
今ぞ 死ぬる 時なり。
身は 死ぬれども 名は 後の世に残れり。
世のために 死ぬ。

問題 9 「死ぬ」の活用を表に作れ。

問題 10 口語の「死ぬ」の活用と比べてみよ。ど
こが違ふか。又、文語動詞「読む」「書く」
の活用と比べてみよ。

問題 11 四段活用の動詞、例へば「読む」といふ
語に於いては、終止形と連體形は共に「讀
む」であり、已然形と命令形は共に「讀め」
こが違ふか。又、文語動詞「読む」「書く」
の活用と比べてみよ。

問題 16 文語動詞「あり」は、五十音圖のどの行
に活用するか。

このやうな活用をラ行變格活用(ラ變)といふ。この
活用に属する動詞は、「あり」のほか「居り」があ
る。又、古く用ひられたものとして「侍り」がある。

問題 17 「居り」「侍り」を活用させてみよ。

問題 18 口語動詞「居る」はどう活用するか。

〔六〕 口語で四段に活用する「蹴る」は、文語では次
のやうに活用する。

球を 蹴す。
球を 蹴たり。
球を 蹴る。
蹴る時は 勢よく 蹴るべし。
蹴れども 遠く 飛ばず。
早く 蹴よ。

問題 19 「蹴る」の活用を表に作れ。

○この動詞は語幹と活用語尾との區別がつかない。

である。文語動詞「死ぬ」の諸活用形に於
いて、活用語尾の形の同じものがあるか。

問題 12 文語動詞「死ぬ」は、五十音圖のどの行
に活用するか。

このやうな活用をナ行變格活用(ナ變)といふ。この
活用に属する動詞は、右の「死ぬ」を除くと、古く
用ひられたものとして「往ぬ」があるだけである。

〔五〕 口語で四段に活用する「ある」は、文語では次
のやうに活用する。

魂 天外に 飛び、心 ここに ありず。
顔回と いふ 者 ありき。
ここに 昔の 關あとも あり。
備へ ある ところ 愛ひ なし。
備へは あれども、なほ 心を ゆるむる こ
と なかれ。
み國に 榮え あれ。

問題 13 「あり」の活用を表に作れ。

問題 14 終止形はどんな音で終つてゐるか。

問題 15 口語の「ある」の活用と比べてみよ。ど

問題 20 口語の「蹴る」の活用と比べてみよ。ど
こが違ふか。又、文語動詞「読む」「書く」
の活用と比べてみよ。

問題 21 この活用を口語下一段活用の動詞「受け
る」「捨てる」の活用と比べてみよ。

問題 22 文語動詞「蹴る」は、五十音圖のどの行
に活用するか。

このやうな活用を下一段活用といふ。

〔七〕 口語で下一段に活用する「受ける」は、文語で
は次のやうに活用する。

未だ 試験を 受けず。
昨日 試験を 受けたり。
地理の 試験を 受く。
試験を 受くる 者は 八時に 集合すべし。
たび／＼ 試験を 受くれども 通らず。
明日 試験を 受けよ。

問題 23 「受く」の活用を表に作れ。

問題 24 口語の「受ける」の活用と比べてみよ。
どこが違ふか。

このやうな活用を下二段活用といふ。

問題25 次の文語動詞は下二段に活用する。一々活用させてみよ。

助く 平く 失す 混す 企つ 撫づ 連ぬ 與ふ
調ふ 認む 越ゆ 恐る 植う

問題26 右の動詞は、口語ではどんなに活用するか。

問題27 口語下一段活用の動詞「得る」「出る」「寝る」「経る」は、文語では「得」「出づ」「寝ぬ」「経ぬ」「経」である。これらはいづれも下二段に活用する。活用させてみよ。又、これらはどの行に活用するか。

問題28 口語下一段活用の動詞「覺える」「聞える」「絶える」「見える」などは、文語では下二段に活用する。どの行に活用するか。

○ア行下二段活用の動詞は「得」「心得」だけである。
○ワ行下二段活用の動詞は「植う」「飢う」「振う」の三語である。

○その他の「一エ」「一ウ」「一ウル」「一ウレ」「一エ

問題31 「見る」の活用を表に作れ。

○この動詞は語幹と活用語尾との區別がつかない。

問題32 口語動詞「見る」の活用と比べてみよ。このやうな活用を、文語でも上一段活用といふ。

問題33 次の語は文語でも上一段に活用する。一々活用させてみよ。

着る 似る 煮る 干る 願ひる 試みる 射る
鑄る 居る 率ゐる

○文語上一段活用の動詞はカ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワの各行にある。

【九】口語で上一段に活用する「起きる」は、文語では次のやうに活用する。

弟は 未だ 起きず。
今朝は 五時に 起きたり。
毎日 六時に 起く。
朝 起くる 時は 速かに すべし。
五時に 起くれども 父に 及ばず。
早く 起きよ。

問題34 「起く」の活用を表に作れ。

文法篇

ヨ」と發音するものは、すべてハ行に活用する動詞である。

問題29 口語で下一段に活用する動詞は、文語ではどんなに活用するか。

問題30 文語で下一段に活用する動詞には、どんなものがあるか。

○文語下二段活用の動詞は、五十音圖の各行とガ・ザ・ダ・バの各行とにある。

七 文語動詞の活用(二)

【八】口語で上一段に活用する「見る」は、文語では次のやうに活用する。

未だ 鳥影を 見ず。
前方に 鳥影を 見たり。
遙か 前方を 見る。
詳細に 見る 時は、その 誤りなる ことを 發見すべし。
見れども 見えず。
注意して 見よ。

問題35 口語動詞「起きる」の活用と比べてみよ。

どこが違ふか。又、文語動詞「見る」の活用と比べてみよ。

このやうな活用を上二段活用といふ。

問題36 次の文語動詞は上二段に活用する。一々活用させてみよ。

起く 過ぐ 落つ 閉づ 用ふ 亡ぶ 恨む 報ゆ
下る

○ヤ行上二段活用の動詞は「老ゆ」「悔ゆ」「報ゆ」の三語である。

○文語上二段活用の動詞はカ・ガ・ク・グ・ハ・バ・マ・ヤ・ラの各行にある。

○「用ふ」は又、ワ行上一段にも活用する。

○上一段活用の「試みる」は又、上二段に活用することもある。

【10】口語カ行變格活用の動詞「くる(來)」は、文語では次のやうに活用する。
人も、尋ねては こず。
少年 一人 きたり。

人く。

人の尋ねてくることなし。

春はくれども花咲かず。

春よ、とくこよ。

問題37 「く」の活用を表に作れ。

○この動詞は語幹と活用語尾との區別がつかない。

問題38 口語の「くる」の活用と比べてみよ。どこが違ふか。

これが違ふか。

問題39 文語動詞「く」はどの行に活用するか。

このやうな活用を、文語でもカ行變格活用(カ變)といふ。この活用に属する動詞は「く」だけである。

問題40 「く」と同じ意味を表す文語動詞に「來たる」がある。この動詞はどう活用するか。

波に たゞよふ 氷山も、來たらば 來たれ、恐れむや。

【二】 口語サ行變格活用の動詞「する」は、文語では次のやうに活用する。

照りも せず、降りも せず。

今日 一日 讀書を したり。

「す」がある。これもサ變に活用する。活用させてみよ。

志 成らずば、死すとも 歸らじ。

問題46 「す」と同じ意味を表す文語動詞に「なす」がある。「なす」はどう活用するか。

【三】 文語動詞の活用の種類は、右に挙げた通りである。

問題47 文語動詞の活用にはどんな種類があるか。口語動詞ではどうか。

問題48 文語動詞と口語動詞との活用の種類を對照してみると、その間にどんな關係が見られるか。

問題49 文語動詞の各の種類の代表的な語を挙げて、これに打消の「ず」を附けてみよ。五十音圖のどの段の音から「ず」に續くか。

問題50 下一段活用及びカ變に属する動詞は、ただ一語づつである。サ變に属するものも、複合動詞の場合を除けばなゞ一語である。

難 汝を 玉に ず。

する、事 なくて 日は 過ぎぬ。

世の ために すれども、世人 その 眞意を 知らず。

汝 怠らず 仕事を せよ。

問題41 「ず」の活用を表に作れ。

○この動詞は語幹と活用語尾との區別がつかない。

問題42 口語の「する」の活用と比べてみよ。どこが違ふか。

問題43 文語動詞「ず」は、どの行に活用するか。

このやうな活用を、文語でもサ行變格活用(サ變)といふ。この活用に属する本来の動詞は「ず」だけであるが、この「ず」は名詞等と合して多くのサ變複合動詞を作る。

罪す 與す 嘉す 輕んず 甘んず 疎んず
先んず 全うす 忝うす 裂す 譯す 命ず
論ず 生ず 活動す 學問す

問題44 右のサ變動詞を活用させてみよ。

問題45 「死ぬ」と同じ意味を表す文語動詞に「死

ナ變・ラ變に属するものも極めて少い。上一段活用に属する動詞もさほど多くない。これらを二々挙げてみよ。

問題51 以上を除けば、動詞は、四段活用か、上二段活用か、下二段活用に属する。四段か、上二段か、下二段かを簡単に見分ける方法を考へてみよ。

【三】 文語動詞にも音便の形がある。

問題52 (イ) 口語動詞には幾種類の音便の形があるか。

(ロ) 音便の形のある動詞は何活用の動詞か。

(ハ) どういふ場合に音便の形が見られるか。

文語では、主として、四段・ナ變・ラ變の動詞が助詞「て」に連なる時に現れる。しかし、口語と違つて「て」に連なる場合にいつでも音便の形が用ひられるといふのではない。さうして、口語の場合と比べると、その種類が一つ多くなつてゐる。

一 語尾がイとなるもの(イ音便)——カ行四段のキ、ガ行四段のギから。(ガ行の時は、「て」は「で」となる。)

二 語尾がウとなるもの(ウ音便)——ハ行四段のヒから。

三 語尾がンとなるもの(撥音便)——バ行四段のビ、マ行四段のミ、ナ變のニから。(この場合、「て」は「で」となる。)

四 語尾が促音となるもの(促音便)——タ行四段のチ、ハ行四段のヒ、ラ行四段のリ、ラ變のリから。

問題 53 右の四種類の各々の實例を考へてみよ。

〔四〕 口語では、例へば「泳ぐ」に對して「泳ぐことができる」の意の「泳げる」といふ動詞があるやうに、四段活用動詞には、これに對する可動動詞がある。しかし文語には、このやうな言ひ方はない。

〔五〕 (一) 戸 ぶのづから 戸を あく。
(二) 疑ひ ちのづから 疑ひを 解く。

〔六〕 文語動詞の連用形が中止法として用ひられることは、口語と同様である。

風 叫び、海 怒る。

〔七〕 文語動詞の連體形及び已然形は、次のやうに、文の終りに用ひられることがある。

(一) 花の 香む する。

これも 勇士の 一人になむ ある。

月や 出づる。

誰をか 尋ねる。

(二) 春をこそ 待て。

月こそ 出づれ。

即ち、或る一定の助詞を受けて動詞で文を終止する時に、或は連體形で、或は已然形で、言ひ切りにするのである。

問題 55 どういふ場合に連體形が用ひられ、どういふ場合に已然形が用ひられるか。右の例文によつて考へてみよ。

問題 56 次の漢字を、口語と文語との動詞に用ひ

文法篇

解く。

(三) 廣場に 集る。 人を 集む。

(四) 子犬 生まる。 犬 子を 産む。

(五) 名 現る。 名を 現す。

(六) 水 流る。 水を 流す。

(七) 花 はらぐと 散る。 花を 散らす。

(八) 人 起く。 人を 起す。

湯 沸く。 湯を 沸かす。

問題 54 右の動詞の活用を調べよ。

このやうに、文語に於いても、語の中心をなす部分に共通點のある動詞の間に、活用が違ふに従つて、その動作や作用を、(一)それ自身だけの働きとして表すものと、(二)他に對する働きかけ、又は他を作ら出す働きとして表すものと、この二種類がある。又その表す意味は違ふが、活用の同じものもある。

風 吹く。 火を 吹く。

川水 増す。 池の 水を 増す。

雨 注ぐ。 水を 注ぐ。

て、その活用の仕方と比べてみよ。

絶 望 老 弱 孤 獨 換 下 悔 生

問題 57 次の文の傍線を附けた動詞の活用の種類を考へよ。

(一) 紫式部は 幼き 頃より 物覚え よく、兄の

書を 讀むを 聞きあて、直ちに これを そら

んじ、少しも 忘るる こと なかりしかば、父

の 爲時は 常に その 頭を 撫でて、「汝の

男と、生まれざりしが 口惜し。」と 言ひたりと

ぞ。夫に 別れて 後、宮中に 召されて、上東

門院に 漢文 漢詩を 教へまゐらせたり。

(二) 寺門を出で、苔むしたる坂道をくだりて、那智の

瀧の正面に立つ。仰げば、百數十米の中空より瀧

ち来る瀧、初めは水筋通して見ゆれども、岩に當

り右に碎け、下は漢々として雲のごとく、綿のご

とく、美觀、言語に盡くしがたし。

問題 58 次の文に誤りがあつたら正せ。

(一) 若き時學はずば、老ひて悔うる時あるべし。

(二) 國家の榮へんことを願ひて、絶へず産業を奨励せ

- り。
- (三) みづから深くその誤りを恥じて、再び人に教ゆるを欲せず。
- (四) 鹿追う獵師は山を見ず、飢えたるものは食を選ばず。
- (五) 堅く門を閉じて、決して出することなかれ。
- (六) 勇むで家を出でたり。
- (七) 重荷を負ふて坂を登る。
- (八) 試みに数匹の馬を追ひ落したるに、ころびて倒れるもあり、足を折りて死ぬもあり。

八 文語形容詞の活用

【一】 問題 1 口語の形容詞はどんなに活用するか。
又どんな活用形があるか。
今、口語形容詞「よい」が、文語ではどう活用するかを調べてみると、次の通りである。

- (一) 月 よくば 共に 眺めむ。
(二) 今宵は 月 よからず。
(三) 雲 はれ行きて 月も よく なりぬ。

「べし」などに違なる形であるが、これも連體形とする。

(八) は、「ど」「ども」に連なり、又「ば」に連なつて、既にさうであるといふ意味を表す形である。故に已然形といふ。

(九) は、命令の意味を表す形である。故に命令形といふ。

問題 2 右にならつて、「高し」「寒し」の文語に於ける活用を調べてみよ。

【三】 右の「よし」の活用を表にまとめると、次のやうになる。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
よし	よ	よから	よかり	よし	よき	よけれ	よかれ
主な用法	るに遠なきに連なる	くから	くかり	切言ひ	速なるに	くはれ	命令の意で言ひ切る

問題 3 口語形容詞「よい」の活用と比べてみよ。
どこが違ふか。

文法篇

問題 4 次の語は「よし」と同じやうに活用する。

- (四) 月 いと よかりき。
(五) 月 よし、夜 よし、水も よし。
(六) 秋は 月 よき 時なり。
(七) 今宵の 月は よかるべし。
(八) 月は よけれども 風 やゝ 寒し。
(九) 夜も よかれ、月も よかれ。
これを文語の動詞の場合に準じてまとめると、次のやうに六つの活用形が立てられる。
- (一) 及び(二)は、共に「ば」に連なつて假定の意味を表す形である。又(三)は、「む(ん)」「ず」に連なる。故にこの(一)と(二)とを合はせて未然形といふ。

(三)は、「なる」等の川言に連なる形、(四)は、「き」「けり」等に連なる形である。故にこの(三)と(四)とを合はせて連用形といふ。

(五)は、言ひ切りに用ひる形である。故に終止形といふ。

(六)は「時」「事」「物」「人」など各種の體言に連なる形であるから、連體形といふ。(七)は、

活用させてみよ。

赤し 青し 白し 強し 弱し 廣し 狭し 清し 暗し 幼し 無し

【三】 次に、口語形容詞「正しい」の文語に於ける活用を調べてみると、次の通りである。

正しくば 何か 恐れむ。

いづれか 正しからむ。

その 心も 次第に 正しく なりぬ。

君は 正しかりき。

心 極めて 正し。

心 正しき 人なりき。

常に 正しかるべし。

言 正しけれども 世に 用ひられず。

君よ、正しかれ。

問題 5 「正しい」の活用を表に作れ。

問題 6 口語形容詞「正しい」の活用と比べてみよ。どこが違ふか。

問題 7 「よし」の活用と比べて違ふ點はないか。

問題 8 次の語は「正しい」と同じやうに活用する。

四十七

活用させてみよ。

勇まし 嬉し 苦し 樂し 激し 久し 惜し
珍し 美し 詳し 涼し

問題 9 口語形容詞「同じだ」に當るものは、文語では「同じ」であつて、形容詞に属する。「同じ」を活用させてみよ。「正し」と比べ、どこが違ふか。

「四」「よし」のやうな活用をク活用、「正し」のやうな活用をシク活用といふ。文語の形容詞の活用には、この二種類がある。

「五」形容詞にも音便の形がある。主として、連用形のうちの「く」「しく」の形が他の用言に連なる時と、連體形のうちの「き」「しき」の形が助詞「かな」に連なる時に現れる。前者はッ音便に、後者はイ音便になる。

雨 ひとしきり 強う 降る。
何 着ても 美しう なる 月見かな。
よいかな。 悲しいかな。

「六」形容詞の連用形のうち「く」「しく」の形は、活用するか調べてみると、次の通りである。

- (一) 風 静かならず。
海上も 静かならむ。
- (二) 海 いと 静かなりき。
- (三) 波 いと 静かに なる。
- (四) 天 よく 晴れて、海 いと 静かなり。
- (五) 波 静かなる 時 あり。
- (六) 夜は 静かなれども、なほ 眠る こと かし。

(七) 今宵 一夜は 静かなれ。

問題 1 右にならつて、「壯烈なり」の活用の仕方、を調べてみよ。

このやうに、文語形容動詞には、七つの違つた形が見られるが、動詞の場合に準じてまとめると、右のうちの(一)と(三)とが一つの活用形となり、結局、動詞及び形容詞の場合と同様に、六つの活用形が立てられる。

「二」「静かなり」「壯烈なり」の活用を表にまとめると、次の通りである。

用言を修飾するのに用ひられる。

天 よく 晴れたり。
正しく 讀む。
又「く」「しく」の形は、中止法としても用ひられる。

風 強く、波 高し。
夏は 涼しく、冬は 暖かなり。

「七」連體形のうち、「き」「しき」の形及び已然形は、動詞の場合と同様或る一定の助詞を受けて文を終止する時に用ひられる。

(一) うらみぞ 深き。
心なむ 正しき。
風や 強き。
などか 苦しき。
(二) 月こそ よけれ。
祝ふ 今日こそ 樂しけれ。

九 文語形容動詞の活用

今、口語形容動詞「静かだ」が、文語ではどう

基本の形	語幹			
	未然形	連用形	終止形	連體形
静かなり	静か	なり	なり	なれ
壯烈なり	壯烈	なり	なり	なれ
主な用法	連なるに	に	に	に

問題 2 口語形容動詞「静かだ」の活用と比べてみよ。

問題 3 次の語は、「静かなり」「壯烈なり」と同じやうに活用する。活用させてみよ。

鮮かなり 穏かなり 盛んかなり 巧みなり 懇切なり
丁寧なり 厳かなり 速かなり 隆重なり のどかなり
遙かなり 異なり

「三」文語に「堂々たり」といふ語がある。その活用は次の通りである。

その 態度 甚だ 堂々たらず。
態度は 常に 堂々たりき。
堂々と 所信を 述ぶ。
威風 堂々たり。

堂々たる 威容を示す。

態度 堂々たれば、賞讃せざる者なし。

常に 堂々たれ。

問題 4 「堂々たり」の活用を表に作れ。

問題 5 「静かなり」の活用と比べてみよ。どんな

共通点があるか。

問題 6 次の語は「堂々たり」と同じやうに活用

する。活用させてみよ。

泰然たり 肅然たり 茫然たり 凛然たり 朗々たり

洋々たり 濛々たり 矍々たり 駭々たり 燦々たり

○この活用の連體形「たる」は、口語の文章の中にも廣

用ひられる。

決然たる 態度で 會議に 臨んだ。

〔四〕「堂々たり」も、活用の仕方について、「静かな

り」と共通する点がある。故にこれも形容動詞と見

ることができ「静かなり」のやうな活用をナリ活

用「堂々たり」のやうな活用をタリ活用といふ。文

語の形容動詞の活用にはこの二種類がある。

〔五〕形容動詞の連用形のうち、「に」「と」の形

なすに 宜し。

(二) けやき・栗・かしはいづれも甚だ堅く、木目細や

かなり。中にもけやきは、木目美しく、磨けば美

麗なる光澤を生じ、又くるひ少きが故に、裝飾材

として珍重せられ、栗は耐久・耐濕の性、殊に著

しきを以つて、家屋の土臺、鐵道の枕木等の用に

供せられ、かしは最も堅くして彈力に富むが故に、

鎗・車・運動器具のごとき強烈なる力を受けるも

のを製作するに適せり。

問題 8 「自立語で活用の有るもの」の章の初め

の例文に就いて、その中の用言の活用の仕

方を示せ。

は、用言を修飾するのに用ひられる。

穩かに ふるまふ。 盛んに 活動す。

端然と 坐す。 朗々と 歌ふ。

〔六〕ナリ活用の連用形「に」は、それだけで中止法

として用ひられるが、タリ活用の連用形「と」は、

それだけでは中止法として用ひられず、必ず「して」

を伴ふ。

氣候 溫和に、風光 明らかなり。

風采 堂々として、音聲 朗々たり。

〔七〕形容動詞の連體形・已然形が、或る一定の助詞

を受けて文を終止する時に用ひられることは、動詞・

形容詞の場合と同様である。

何ぞ かく 茫然たる。

今宵 月こそ 明らかなれ。

問題 7 次の文から形容詞・形容動詞を抜き出し、

その活用の仕方を示せ。

(二) もみは 柔かにして 工作に 便なれば、諸種の

箱を 作るに 用ひられ、つがは 堅くして 久

しきに 耐ふるが 故に、家屋の 柱 土臺と

		倒懸			口	聲
		延幹				
		未然				
		連用				
		終止				
		連綴				
		假定				
		命令				
シク 活用	ク 活用	格類				
		倒語				
		延幹			文	語
		未然				
		連用				
		終止				
		連綴				
		已然				
		命令				

（第三卷） 口語及び文語形容動詞活用表

		阿 答	口
		這 幹	
		太 然	
		達 用	
		終 止	
		通 達	
		假 定	
		命 令	
タリ活用	ナリ活用	脱 離	文
		例 語	
		這 幹	
		太 然	
		達 用	
		終 止	
		通 達	
		已 然	
		命 令	經

漢文篇

學 習

學而時習之不亦說乎。

タヅネテ
温故而知新
キヲ
シキヲ

學ヒテ而不レ思ハ則チ罔フシ思ヒテ而不レ學ハ則チ殆イテフシ

知^ル之^ヲ爲^シ知^{ルト}之^ヲ不^ル知^ラ爲^ス不^ト知^ラ。是^レ知^ル也。

知之者不如好之者。好之者不如樂之者。

朝^ニ聞^{ケバ}道^ヲ夕^ニ死^{ストモ}可^{ナリ}矣。

行^{クニ}不^レ出^ラ徑^ニ

學ハス如ス不レ及バ、猶モ恐レ失ハ之ヲ。

逝者如斯夫。不舍晝夜。

古之學者爲己。今之學者爲人。

吾嘗終日不食。終夜不寢。以思。無益。不如學也。

性相近也。習相遠也。

君子博學於文。約之以禮。

過則勿憚改。

過而不改。是謂過矣。

不患人之不己知。患不知人也。

君子欲訥於言。而敏於行。

見賢思齊焉。見不賢而內自省也。

晏平仲善與人交。久而敬之。

過猶不及。

己所不欲。勿施於人。

其身正。不令而行。其身不正。雖令不從。

君子求諸己。小人求諸人。

道聽而塗說。德之棄也。

內省不疚。夫何憂何懼。

言寡尤。行寡悔。祿在其中矣。

仁者安仁。知者利仁。

君子去仁。惡乎成名。

仁者先難而後獲。

仁者己欲立而立人。己欲達而達人。

仁遠乎哉。我欲仁。斯仁至矣。

巧言令色。鮮矣仁。

剛毅木訥近仁。

志士仁人無求生以害仁有殺身以成仁。

君子矜而不爭群不黨。

見義不爲無勇也。

士志於道而恥惡衣惡食者未足與議也。

士而懷居不足以爲士矣。

君子喻於義小人喻於利。

士不可以不弘毅任重而道遠仁以爲己任不亦重乎死而後已不亦遠乎。

三軍可奪帥也匹夫不可奪志也。

歲寒然後知松柏之後凋也。

見利思義見危授命久要不忘平生之言亦可以爲成人矣。

以直報怨以德報德。

人無遠慮必有近憂。

君子憂道不憂貧。

君子有九思視思明聽思聰色思溫貌思恭言思忠事思敬疑思問忿思難見得思義。

德不孤必有鄰。

君子之德風小人之德草草上之風必偃。

鳥之將死其鳴也哀人之將死其言也善。

其爲人也孝弟而好犯上者鮮矣。

祭如在祭神如神在。

父母唯其疾之憂。

父母之年不可不知也一則以喜一則以懼。

夫孝德之本也教之所由生也。
以孝事君則忠以敬事長則順。
今之孝者是謂能養至於大馬皆能有養不敬何以別乎。

二立志

一學莫要於立志而立志亦非強之只從本心所好而已。
一眞有大志者克勤小物眞有遠慮者不忽細事。
一責善朋友之道也只須懇到切至以告之不然徒資口舌以博責善之名渠不以爲德卻以爲仇無益也。
一有好爲大言者其人必小量有好爲壯語者其人必怯懦唯言語不大不壯中有含蓄者多是識量弘恢人物。
一人做事目前多粗脫徒思量來日事譬如行旅人離窰思量前程太不

可入須先料理當下如居處恭執事敬言忠信行篤敬至於寢不尸居不容一寢一食造次顛沛亦皆當下事其料理當下得恰好處卽并過去將來亦自得恰好耳。

一余少壯時氣銳視此學謂容易可做至晚年蹉跎不能如意譬如登山自麓至中腹易中腹至絕頂難凡晚年所爲皆收結事也古語行百里者半九十信然。

一送昨日迎今日送今日迎明日人生百年不過如此故宜愼一日一日不愼遺醜於身後可恨羅山先生謂暮年宜謀一日事余謂此言似淺非淺。

一事固自爲謀而迹似爲人者有之戒勿爲之固爲人謀而或疑自爲者有之勿避嫌不爲。

三藝苑

大日本史

島神庭和

都良香月夜過羅城門吟所作詩曰氣霽風梳新柳髮冰消浪洗舊苔鬚樓上有歎賞聲時人異之又遊竹生島得三千世界眼前盡之句對未成島神庭曰十二因緣心裏空

畫馬之蹄有泥

巨勢金岡善畫爲當時稱首最長畫馬世所傳稱及宇多帝居仁和寺畫馬殿壁有物夜嚙傍近田稻人不知其所自後見畫馬之蹄有泥試劇其眼睛即止云

博雅篤志

源博雅好音樂琴笛琵琶箏篳皆極其妙與博雅同時蟬丸者敦實親王

之難色也親王精琵琶蟬丸好之常侍側遂極其妙後隱居會坂琵琶有流泉啄木二曲世希知之者博雅聞蟬丸傳之欲就學之使人勤移家京師蟬丸不答博雅每夜造其廬覘之如此三年不得聞其曲會秋夜月明博雅意今夜彼必彈秘曲乃又往蟬丸撥絃獨言曰世復有與我同志者哉冀俱賞此良夜博雅突入曰我是源博雅也因敘其懇款遂以二曲授之其篤志如此

伐樹賞月

源經信博識多藝妙和歌白河帝幸西河設詩歌管絃三船選一時名輩隨其所長分乘之三船既泛中流經信猶未至帝不懌頃之經信來跪沙汀喚曰請回船乃上管絃船彈琵琶獻詩歌帝欣然蓋經信以長於三事不斥言棗船也

嘉保元年爲太宰權帥二年赴府路宿筑前逢川驛會八月十五夜驛邸

有大楓樹蔽月。經信命伐之。通宵彈琵琶。朗吟其風致如此。

歌之佳處在得大體而已

藤原俊成常曰。歌之佳處在得大體而已。不可務爲彫刻組織。譬諸畫工。圖物。倘徒事丹青爛絢。則反使人厭之。要自然而有味。是爲得之。平居作和歌。披古淨衣。擁桐火桶。凝然靜坐。未嘗有惰容。及成。雅淡深邃。語熟意婉。後鳥羽帝最愛之。

定家用心作歌

藤原定家在家作歌。必洞開南面。令可遠望。而整襟端坐。曰。平常於清肅中。習之。則雖在至尊之前。不至失措。又曰。凡臨作和歌。先誦故鄉有母秋風。淚旅館無人暮雨。魂蘭省花時錦帳下。廬山雨夜草庵中。句則意格自高妙。其用心之勤。類如此。

吹笙于足柄山

源義光少好音律。究其精妙。嘗學笙於豐原時元。時元卒。時其子時秋尚幼。不得傳。祕曲乃授義光。大食調入調。及義光赴陸奥。時秋追至近江。鏡驛乃請與俱。義光止之。數次不可行。至足柄山。義光駐轡。謂之曰。吾深感子志。然此山有關。嚴禁闌出。吾已以死自矢。必當斫關而過。子以身殉之。無益也。宜速歸。時秋猶請從。不已。義光稍曉其意。乃下馬布二楯。俱坐。因於胡篳篥中。出時元所傳大食入調譜。示之。又問。齋笙乎。否。時秋乃探懷中。出笙。義光曰。子所以從我者。想必此事。我今赴戰。生歸難期。子有官守。宜歸全其業。乃悉以祕曲傳之。畢各別去。

靜夜思

李白

牀前明月光

疑是地上霜

舉首望山月

低頭思故鄉

雜詩

王維

君自故鄉來

應知故鄉事

來日綺窓前

寒梅著花未

漢文篇

芙蓉樓送辛漸

王昌齡

寒雨連江夜入吳，
洛陽親友如相問。

不明送客楚山孤，
一片冰心在玉壺。

江南春

杜牧

千里鶯啼綠映紅，
南朝四百八十寺。

水村山郭酒旗風，
多少樓臺烟雨中。

山房春事

岑參

梁園日暮亂飛鴉，
庭樹不知人去盡。

極目蕭條三兩家，
春來還發舊時花。

早發白帝城

李白

朝辭白帝彩雲間，
兩岸猿聲啼不住。

千里江陵一日還，
輕舟已過萬重山。

山行

杜牧

遠上寒山石徑斜，
停車坐愛楓林晚。

白雲生處有人家，
霜葉紅於二月花。

偶成

朱熹

少年易老學難成，
未覺池塘春草夢。

一寸光陰不可輕，
階前梧葉已秋聲。

四成語

千羊之皮不如一狐之腋。

趙簡子有臣曰周舍死。簡子每聽朝不悅曰：千羊之皮不如一狐之腋。

諸大夫朝徒聞唯唯不聞周舍之鄂鄂也。

寧爲雞口無爲牛後。

漢文篇

洛陽人蘇秦游說秦，惠王不用。乃往說燕，文侯與趙從親，燕資之以至。趙說肅侯曰：「諸侯之卒十倍於秦，并力西向，秦必破矣。爲大王計，莫若六國從親以損秦。肅侯乃資之以約諸侯。蘇秦以鄙諺說諸侯曰：『寧爲雞口，無爲牛後。』於是六國從合。」

膠柱鼓瑟。

趙孝成王立，秦攻趙，廉頗軍長平，堅壁不出。秦人行千金爲反間，曰：「秦獨畏馬服君趙奢之子括爲將耳。」王使括代頗。相如曰：「王以名使括，若膠柱鼓瑟耳。」括徒能讀其父書，不知合變也。王不聽。括少學兵法，以天下莫能當與父奢言，奢不能難，然不以爲然。括母問故，奢曰：「兵死地也，而括易言之。」趙若將括，必破趙軍。及括將行，其母上書言括不可使，括至軍，果爲秦將白起所射殺，卒四十萬皆降，坑於長平。推赤心置人腹中。

蕭王擊銅馬諸賊，悉破降之。諸將未信降者，降者亦不自安。王勅各歸營，勒兵自乘輕騎案行。諸部降者相語曰：「蕭王推赤心置人腹中，安得不效死乎？」悉以分配諸將。南徇河內。有志者事竟成。

後漢光武帝初，以張步爲東萊太守，已而受劉永命。王、齊將軍耿弇屢戰大破之，拔祝阿、齊南臨菑，車駕至臨菑，勞軍，謂弇曰：「將軍前在南陽建大策，嘗以爲落落難合，有志者事竟成也。」步敗，齊地悉平。畫虎類狗。

馬援在交趾，嘗遣書戒其兄子，曰：「吾欲汝曹聞人過如聞父母名耳，可聞，口不可言。好議論，人長短是非，政法不願子孫有此行也。龍伯高敦厚周慎，謙約節儉，吾愛之重之，願汝曹效之。杜季良豪俠好義，愛人之憂，樂人之樂，父喪致客，數郡畢至。吾愛之重之，不願汝曹效之。」

也。效伯高不得，猶爲謹勅之上。所謂刻鵠不成，尚類鶩也。效季良不得，陷爲天下輕薄子。所謂畫虎不成，反類狗也。

不入虎穴，不得虎子。

後漢和帝永元十四年，徵班超還京師。超起自書生，投筆有封侯萬里外之志。有相者謂曰：「生燕頰虎頭，飛而食肉，萬里侯之相也。明帝時，自假司馬入西域，至鄯善，其王禮之甚備。匈奴使來，頓疎懈。超會吏士三十六人，曰：『不入虎穴，不得虎子。』奔虜營，斬其使，及從士三十餘級，鄯善一國震怖，超告以威德，使勿復與虜通。」

多多益辦。

漢高祖嘗從容問韓信諸將能將兵多少。上曰：「如我能將幾何？」信曰：「陛下不過將十萬。」上曰：「於君何如？」曰：「臣多多益辦。」上笑曰：「多多益辦，何以爲我？」禽曰：「陛下不能將兵，而善將將，此信之所以爲陛下禽也。且陛下

所謂天授，非人力也。

宋襄之仁。

宋襄公欲霸諸侯，與楚戰。公子目夷請及其未陣擊之。公曰：「君子不困人於阨，遂爲楚所敗。世笑以爲宋襄之仁。」

臥薪嘗膽。

吳王闔廬舉伍員謀國事。員字子胥，楚人伍奢之子。奢誅而奔吳，以吳兵入郢。吳伐越，闔廬傷而死。子夫差立，子胥復事之。夫差志復讎，朝夕臥薪中，出入使人呼曰：「夫差而忘越人之殺而父耶？」周敬王二十六年，夫差遂敗越于夫椒。越王句踐以餘兵棲會稽山，請爲臣，妻爲妾。子胥言不可。太宰伯嚭受越賂，說夫差赦越。句踐反國，懸膽於坐臥，卽仰膽嘗之，曰：「女忘會稽之恥耶？」舉國政屬大夫種，而與范蠡治兵事。謀吳，四面楚歌。

項羽至垓下。兵少食盡。韓信等乘之。羽敗入壁。圍之數重。羽夜聞漢軍

四面皆楚歌。大驚曰。漢皆已得楚乎。何楚人多也。

遼東豕。

初光武帝討王郎。漁陽太守彭寵發突騎。轉糧不絕。自負其功。意望甚

高。不能滿。幽州牧朱浮與書曰。遼東有豕生子。白頭將獻之。道遇群豕。

皆白。以子之功。論於朝廷。遼東豕也。

髀裏肉生。

劉備嘗於劉表座起至厠。還慨然流涕。表怪問之。備曰。常時身不離鞍。

髀肉皆消。今不復騎。髀裏肉生。日月如流。老將至。功業不建。是以悲耳。

